

目次 [見出しをクリックまたはタップしてリンク先にジャンプします]

《生物多様性への挑戦》千葉 聡 教授 [生態学] (東北アジア研究センター長)

- 人間中心主義と生態系中心主義に関して
- 自然に人間が関わることによる弊害など
- 生物多様性に関して

《ジェンダードリサーチのススメ》大隅典子教授 [発生発達神経科学] (副学長／大学院医学系研究科)

- 性差を扱うことへの疑問
- バイアスに関して
- 「女子」枠の不平等感
- 近代「性」の扱いについて

《多様性を担うのは誰か》森本 浩一 総長特命教授 [言語思想] (教養教育院)

《話題提供者全員に宛てたと思われるコメント》

《生物多様性への挑戦》千葉 聡 教授 [生態学] (東北アジア研究センター長)

- 人間中心主義と生態系中心主義に関して

質問	千葉先生に質問です。人間中心主義と生態系中心主義を両立させようという立場は、それらの中立的立場を目指すものなのでしょうか。もしそうであるならば、そのバランスをどのように測るのでしょうか。どのように自らの立場を定義していらっしゃるのでしょうか。
質問	人間中心主義と生態系中心主義は互いに対になるものではと思ったのですが、両立できるのでしょうか。
回答 (千葉)	<p>中立的というより両方重要なので両立を目指すという意味です。別の言い方をすると、役立つことを重視するか、倫理を重視するか、ということですが、普通はどちらも大事です。倫理だけでは食べていけませんが、ビジネスに倫理は欠かせません（信用を失って結局損するので、役立つ、という面もあります）。</p> <p>とはいえ状況によって比重は変わると思います。要は両立を考えると、生態系中心主義はコストに置き換えられるので、そのコストにどう対応するかです。具体例として国立公園の例でいえば、野生動物の「生存権」を脅かさないように対策をとる（生態系中心主義）のが、同時に地域の人々の生活にメリットがあるような（人間中心主義）工夫をするのはひとつです。野生動物や自然を体験しに来た人々から「入園料」を徴収し（人間中心主義でうまれる利益）、動物の管理や保護を担当する住民の生活費にあてたりします（日本では行われていませんが、海外ではごく一般的です）。</p> <p>また両者を明確にわけるのはではなく、連続的に融合する形での両立というのも考えられます。具体的には、企業が生物多様性の維持に取り組むことで、CSR や企業イメージ向上などから得られる利益で、保全のインセンティブを得られる、というケースがあるでしょう。この場合、利益、という人間中心主義だけでなく、企業倫理の問題も含むので、生態系中心主義の要素も含まれます。</p>

しかし条件によっては、生態系中心主義のコストが高くなりすぎて、経済的な理由からこれが不可能な事例もあるでしょう。状況に応じて、可能な範囲で両立を目指すというのが、妥当な解決目標と思います。

質問

人間中心主義によって生態系を破壊してしまい、結果的に自然からの恩恵が少なくなってしまう例を挙げ生態系中心主義を擁護していましたが、これはただ単に外来種を持ち込んだ場合の結果を見誤っただけだと考えます。生態系の破壊が人間の損失となるから生態系を保護するという考え方は人間中心主義と同じだと思います。

回答(千葉)

生物多様性の恩恵を得ようとして外来種を導入した結果、恩恵がなくなった、というのではなく、生物多様性自体が損なわれた、という意味です。外来種の例を挙げましたが、それに限らず、例えば、植林、放流、自然公園の整備などの取り組みは、すべて本質は同じです。自然公園は人間にとって気持ちの良い、あるいは楽しい場所であるように生態系を利用するわけですが(人によって何が快適かは違いますが)、有害な生物や気持ちの悪い生物が現れないよう、あるいは人間が快適に過ごせるよう、落葉層を取り除いたり雑草を刈ります。これによって生物多様性は損なわれるので、生態系中心主義の立場からは不適切な取り組みということになります。つまり両者は往々にしてトレードオフの関係にあります。これをどう緩和・解決するかが重要です。

質問

千葉先生に質問です。

生態系中心主義について理解に至らなかったので質問いたします。

生態系中心主義とは、生物多様性がどのような利益をもたらすかという議論ではなく、それそのものが価値であるということですか。

たとえば言えば、私の存在する価値は、私が他者にもたらす利益の観点から考えるのではなく、その存在そのものにあるというようなものなのでしょうか。

回答(千葉)

この理解でいいと思います。あなたが仮に誰にも利益をもたらしていないとしても、あなたにはかけがえのない価値があります。この場合のあなたを自然に置き換えて考えるとわかりやすいと思います。人間の利益になるかどうかとは無関係に自然、生物個体全てに価値があると考えます。古典的な考えとしては、人間の権利を自然・野生生物に拡張したものとする立場があります。

ただし現実には非常に難しい矛盾を含む考えです。そもそも人間を除外して、人間の精神的性質である「価値」や「権利」を想定できるのかという点は、昔から議論になってきました。また非常に幅のある考えで、完全に人間を含めない場合から、人間の価値観をある程度許容する立場もあります。

質問

生物多様性を守るために生態系中心主義的に動いていきたいところではありますが、人間中心主義的に動かなければそれを実現することができない。そうすると、生態系を守るという行為自体を資本破壊の一環に置くことで、人間中心主義に動きつつも生態系中心主義も両立することができると思います。そこで問題となるとおもわれるのは、どのように生態系を守るという行為を消費活動の輪に置くかということだと思います。観光が真っ先に例に挙げられると思うのですが、観光という需要だけでは、特殊な動植物を守ることはできても、見

かけ上は特殊とはいいがたい動植物も多くいると思います。遺伝子の需要も生態系を守るぐらゐの資本力があるとは思えません。生態系“自体”を守るという需要をどのように高めればよいか、意見を聞きたいです。

回答（千葉）

ここは重要なポイントで、観光のように可能な場合、アイコン生物のようにそれで守れる生物がいる一方、そうでない生物がいて、それは抜けてしまうという場合があります。そこで最近の考え方に、特定の生物に注目するのではなく、地域独自の種多様性、遺伝的多様性を量として評価する、というのがあります。より多くの多様性を維持するのに貢献した企業はその分、利益を上乗せされる、というものです（企業イメージ向上あるいはCSRの効果も含まれます）。企業倫理にもかかわるので、生態系中心主義の面も含まれます。近年は企業倫理が重視され、その一環として生物多様性の保全が社会的責任（倫理、つまり生態系中心主義）として組み込まれる傾向があるので、今後需要は高まると思います。ビジネスに倫理は本来欠かせないはずですし、企業は社会倫理の順守のため、それなりのコストはかけているので、可能な範囲でそれは自然界に拡張されていくと思います。

質問

千葉先生に質問があります。

人間中心主義と生態系中心主義は、他方を批判する形で生まれたと仰っていましたが、現在の持続可能な社会の維持のための人間中心主義を批判する形で、新たな生態系中心主義の考え方が生まれると思いますか。また、別の新たな主義が生まれると思いますか。

千葉先生のお考えを聞かせていただきたいです。

回答（千葉）

人間中心主義と生態系中心主義は、倫理と仕事のように本来両輪であって、不可分のものです。ただ、時代背景や社会のありようによっていずれかに比重が傾きすぎ、それが相互の批判につながったという経緯だと理解しています。倫理にも社会規範を通して自分の利益になる、という考え方もあるので、人間中心主義と生態系中心主義を2分法で明確に区別することも難しいのかもしれませんが、やはり社会生活の面から考えるとわかりやすいと思いますのでそれを例に挙げます。たとえば様々な出身、性別、年齢の人がいるとコミュニティがうまく機能するから、という理由で組織の構成メンバーの多様性を主張する機能主義は、人間中心主義とよく似ています。一方、出身、性別、年齢の多様性を高くするのは倫理的な義務だと考えるのは、生態系中心主義と似ています。いずれも結果は同じですが、機能主義に傾けば、逆に多様性を下げた方が良く、という差別・排除の主張が正当化されるリスクがあり、それにブレーキをかけるのが倫理です。私は個人的に倫理の方を重視していますが、結果主義、現実主義の立場から、前者を支持する人もいるかもしれません。従って、生物多様性においても両方が常に重視される必要があると思います。別の新たな考えが出る可能性は当然ありますが、どのようになるかはわかりません。

質問

生物多様性は、究極的には人間の幸福のために、その手段として生態系中心主義の考え方も取り入れる必要がある、ということですか。

回答（千葉）

人間の幸福のため、という考え方もあります、人間以外の生物の存在に本質的な価値も認めよう、という考え方もあるという意味です。

もっと雑な言い方をすると、役に立たなく見える存在だからといって不要、と考えるのはやめよう、という考え方もある、ということです。上の質問への答えも参考になると思います。

●自然に人間が関わることによる弊害など

質問	釧路湿原に太陽光パネルの設置が進んでいますが、釧路の自然よりも太陽光から得られる電力を重視する理由がわかりません。そもそも太陽光パネルを森林を切り開いてまで設置する意味ありますか？
回答（千葉）	個人的には収支のメリットとコストが釣り合わないと考えるので反対ですが、状況によるだろうと思います。CO ₂ の問題解決が目標なら、それで緩和される部分と、それで発生する害を適切に計算し、その差し引きで賛否を判断する必要がありますが、それ自体信頼できる形で行われていないのが最大の問題だろうと思います。
質問	人間の環境保全活動によって逆に環境が破壊される可能性に対してどのように対策しているのですか。
回答（千葉）	農業のように人工的で単純な系を扱う場合はある程度予測できますが、自然の生態系のふるまいは極めて複雑なので、農業のノリで操作を試みるとたいがい思い通りにならず失敗します。そこで予測がはずれる可能性があること、失敗する可能性があることを前提に予測と事業計画を立てます。1. 計画立案→2. 事業実施→3. 常に事業の成果をモニタリング→4. 予測が外れた場合は直ちに理由を解明して事業計画を修正→2に戻る、というサイクルで対策を進めます。これを順応的管理と言います。これによって仮に失敗しても、破壊のレベルを最小限に抑えることが可能です。
質問	千葉先生 里山などを見ると人間も生態系に入っているように感じますが、人間は生態系に入っていますか？人間が自然に踏み入った時点でその自然は人工物になる、すなわち人間が自然を保護するとその自然は人工物になってしまいますが、この考えに対して先生はどう思いますか？
回答（千葉）	難しい問題ですが、見方によると思います。入っていると言える場合もあるし、分ける場合もあるでしょう。また、自然と人工、人間と生態系は連続しているので、そのいずれか要素の強い部分を抜き出して自然、人工と言っているのだと思います。たとえば農作物は、どちらか区別するのは困難です（しいて言えば共創物でしょうか）。しかし市場で、自然の恵み、と言う場合もあれば、農家が、私が作りました、と強調する場合があります。自然保護も同じように考えればいいのでは。自然と人間の関係は単純な二分法では記述できませんので。自然保護、というときは、人間を主体、自然を対象として区別し、里山のような場合は、一連のものとして捉えればいいのではないのでしょうか。

●生物多様性に関して

質問

生態系が豊富であることを知るメリットは何でしょうか。どうして小笠原の生態系の調査で生物多様性を調べる必要があるのでしょうか。

回答(千葉)

地球上の生物が辿ってきた進化に人間が介入して大きく変更させることに對し、倫理的な問題を感じるのが理由のひとつ(生態系中心主義)。進化の結果、人間にとって価値のある多様性が存在していれば、それは人間にとって利益になるから(人間中心主義)というののもう一つの理由です。この目的のためには、まず多様性の実態を知らなければなりません。小笠原は両方の意味で、特に重要な土地で、かつ両立のモデルになる地域だからです。

質問

千葉先生のお話について、生物多様性から見た多様性ということで、後半の小笠原諸島についての話の中で、人為的な改変を最小化・修復することを目的にされているというのがありました。SDGsにおける生物多様性保全においても、ほとんど同様な考え方で活動が進められているだろうと考えます。

そこで質問です。特に、いわゆる外来種の侵入というのは、人間活動以前もある程度頻繁に起こっていましたが、こと定着という話になると、外来種導入の失敗例からもわかるように、人間活動が及ぼしてきた物理的・化学的な影響に起因している点が大きいのと考えます。生態系保全における環境変化の修復というのは、表層的な環境保全(外来種の駆除等)ではなく、これら根本的な原因(と考えられる)事象の影響の軽減という認識でよろしいでしょうか。また、この難しさは生態系学というのが、人間が手を加える余地のある学問だからこそのものだと思うのですが、研究者は環境の変化に手を加えるべきなのでしょう。より正確には、環境の変化の修復、というのはどこまで許容されるでしょう。

最後に、環境を扱う研究者は、どの程度の時間的・空間的スケールで環境の変化を扱うべきなのでしょう。現役の研究者としての先生の意見をお聞かせ願いたいです。

回答(千葉)

環境変化の修復、つまり生態系修復の目標は事業ごとに違うと思います。すべてに共通した目標として、多様性の減少分を最小化する、などありますが、現実には個別の事業ごとに目標が違います。社会や住民、研究者が重要性を認識する部分や、それを劣化させる根本的な原因は地域や生態系ごとに違うのが一般的です。

干潟の創出のように生態系サービス向上や種多様性の増加が目標になる場合は、住み場所など環境の整備や汚染物質の除去などが解決策になるでしょう。特定のアイコン生物(オオサンショウウオとかトラとか)個体群の安定な維持が目標になる場合も、解決策は似ています。ある地域の在来種の種数を高める、あるいは外来種の在来種への負の影響を除く、というのが目標になる場合もありますが、この場合は外来種が駆除されます。一方、群集全体の安定性を高める(～絶滅の最小化)のが目標になる場合には、逆に外来種を積極的に利用したり、導入を図る場合もあります(外来種は常に有害とは限りません)。

どこまで手を加えるべきか、は難しい問題で、目的にもよりますが、はっきり言ってしまうと、やってみなければわかりません。理由はまさに、生態系は人間の操作に對し、どう応答するか予測が困難だからです。理論的な予測は可能ですが、現実の事業では外れるケースが大半です。ほんの少しの操作で良いと思って一つの外来種を除去したところ、種間関係が連鎖的に変化して想定外のところに影響が及び、その解決のために、ほぼ半永久的な介入が必要になる場合があります。

個人的には経験から、修復といって手を加えるとたいがい事態が悪化する場合が多いので、手を加えない方がいいという考えになっていますが、そうもいかない場合も多いでしょうし、手を加えて解決する場合もあるので、判断の難しいところです。大事なのは、手を加える場合、予測が外れたり失敗する可能性があることを前提に事業を始めることです。そして予測が外れたことが判ったらすぐに事業計画を修正する、状況によっては事業を中止することです。間違いを認めずに当初の方針のまま行くと、たいがい泥沼になります。このように失敗したらすぐ修正し、事業計画を変えたり、場合によっては中止するような方法を順応的管理と言います。このような柔軟な管理手法が生態系修復には欠かせません。

時間スケール、空間スケールは対象や目的によります。生態系修復でも、たとえば安定な湿地をつくる場合、一般に環境形成、種の定着、生態系の安定などの目標に応じて、短期目標（1, 2年）、中期目標（数年）、長期目標（数十年）を考え、それに応じた対策を取ります。空間スケールも対象次第で、100平方メートルくらいの池の場合もあれば、1万haを越えるスケールになることもあります

質問

千葉先生に質問です。

生物多様性を利用できていないという問題がありましたが、現在において利用できてない、あるいは利用したい生物多様性の要素は具体的に何かありますか。また、それに対する取り組みの方針の具体例を教えてください。

回答（千葉）

いまの流行はCO₂の固定力が強い生物の探索、利用でしょうか。わたしはあまり乗り気ではないですが、環境に有害な物質を分解する能力の高い生物は微生物が多いですが、未知な一方で、注目が大きく、様々な土地で探索活動が行われています。実際にその生物が利用できなくても、遺伝子情報からその機能を他の生物で実現して利用するという取り組みも、特に海外にはあります

●性差を扱うことへの疑問

質問

大隅先生に質問です。違いによって生じる問題が明らかになって初めてその違いが重要であるとわかるのだと思うのですが、重要かどうかはわからないまま、違いを認識することを無批判に善とみなして推し進めることによって問題は生じないのでしょうか。先生のご講演から、違いとして認められるならばそれはどんなものであれ有意義であるというような主張を感じました。

回答 (大隅)

「違い」が重要であるか有意義であるかよりも先に、他者と自己は異なることを前提に、まずは個人それぞれを大切にすることが必要であると考えます。

質問

ジェンダー

・講義内でジェンダーの社会問題について、性差を尊重し認め合うべきもの① (研究対象、男女の性格、骨格など) について認め合うべきだと仰っていましたが、私は性差、性別を考えないべきものもあると思います。②例えば (男子は青、女子は赤、男子は理系、女子は文系という考えはなくすべき)

また、必要以上の男女平等という言葉の先行③ (キャラクターや登場人物の性別) 先生は②③についてはどう考えていますか？またそのように考えた場合、それらの区別をどこでつけてどのように広めていくべきだと考えていますか。

回答 (大隅)

②性別に色のラベルを付すことについては、例えばランドセルの例のようにユニセックス化が進んでいます (ただし、人間の認知は形よりも色に敏感なので、男女別のトイレの表示はマークよりも色分けされていた方が間違っ異なる部屋に入ってしまうことを避けられるでしょう)。女性は文系という考え方は、とくに日本において強い刷り込みとなっていますが、個人個人がそれぞれ自分の好みや得意かどうかに合わせて進路を選択できるようにすることが望ましいと考えます。②「必要以上の男女平等」という言葉の意味がよくわかりませんでした。男女が平等であることは日本国憲法にも書かれています。その上で、個人個人それぞれをリスペクトすることが大切であることは、子どもが小さなうちから教えるべきだと思います。

質問

大隅先生にお聞きします。

人の家族類型は、女性のステータスが低下する方向に進化してきたという説を聞いたことがあります。その説が正しいと仮定すると、その流れに逆らい女性のステータスを向上させようとする現在の風潮は、個々の女性を幸福にしても、ヒト一般にとって望ましいものであるのかどうか自信が持てなくなりました。大隅先生は、どのようにして女性の社会参画をすべきであるとの確信に至ったのでしょうか。

回答 (大隅)

家族類型に関して、エマニュエル・トッドの『我々はどこから来て、今どこにいるのか？』には、歴史の過程で女性のステータスが低下していった社会 (ロシアや中国など) と、個人主義的、核家族社会、双系的 (父系的でない) で女性のステータスが高い社会 (英国、米国、フランスなど) が存在し、これらの家族類型は経済構造とも相関することが書かれています。まずは一方的な知識に囚われるのではなく、世界全体や歴史を学ぶことをお勧めします。

●バイアスに関して

質問

「ジェンダー問題は女性のやる気のなさも関わっているのではないか」という疑問を友人から投げかけられました。なんとなくクラスの代表や役員に関わってくれる女性もいましたが、やはり、男性の方が代表をやりたい人が多く、女性が挙手するのは少なかったのが、女性の高位の役職に就こうとする人がそもそも少ない、就こうとする意欲をつける習慣がなかったのではないかと考えました。どのように考えますか？ご意見を伺いたいです。

回答（大隅）

女性の「やる気の無さ」を問題にする背景には、男性から見て気づいていない無意識のバイアスが潜んでいる可能性があります。授業では時間が無くて触れられませんでした。大沢真知子著の『なぜ管理職は少ないのか』などにエビデンスが多数載っています。その書評を前総研大学長の長谷川真理子先生が書かれていますので、以下のサイトをお読みください。
<https://book.asahi.com/article/12502313>

質問

大隅先生

祭りなどで男しかできない役職などがありますが、伝統と女性の権利はどちらのほうが大切ですか？

生物にとって子孫を残すことは最重要任務であるのに、なぜ人間は女性蔑視なのですか？女性の研究者の欠点として妊娠休暇により継続的な研究ができないということがありますが、この点に関してはどう対処すべきですか？

回答（大隅）

「伝統と女性の権利」は同列で扱える問題ではありませんね。女性と男性は生物学的に（平均値で言えば）筋力の差異は大きいので、だんじり祭りの担ぎ手として女性はふさわしくないかもしれません。その場合、性染色体がXXで性自認が男性の方でも難しいかもしれませんね。「女性蔑視」の社会の方が多いということではありません。エマニュエル・トッドの『我々はどこから来て、今どこにいるのか？』には、歴史の過程で女性のステータスが低下していった社会（ロシアや中国など）と、個人主義的、核家族社会、双系的（父系的でない）で女性のステータスが高い社会（英国、米国、フランスなど）があり、このような家族類型と経済構造の間に相関性が認められることが書かれています。東北大学生には、狭い知識に囚われず広く学んで欲しいと願います。出産にあたって産前産後の休暇や育児休業は権利として認められていますが、継続的な研究が「できない」かどうかは、その方の置かれた環境によって異なります。パートナーの方の参画や、シッターの雇用等、さまざまな対処方法があります。東北大学では男女ともに利用できる学内保育園なども整備しています。

質問

性差について質問があります。東北大学や、それ以外の大学においても文学部には女性が多く工学部や理学部においては男性が多いですが、それは脳化学的な性差によるものなのか、それとも教育によるものなのか、先生はどちらとお考えでしょうか。

回答（大隅）

全学教育の講義の方では詳しく扱っていますが、生物学的には「ゲノムの性差→性特異的な生殖腺の分化→身体や脳の性分化」が生じます。「平均値」で言えば、男性は空間認知に優れ、女性はコミュニケーションに長けているという性質がありますが、個人差（分布）の方が平均値の差よりも大きいことは認識しておかれると良いでしょう。その上で、子どもが小さなときから、「男の子だから車の玩具で遊ばせよう」「女の子だからふわふわのぬいぐるみを与えよう」など、家族等、周囲からの影響を受けるということも多くあります。二者択一の問題ではなく、両方が合わさった問題と思います。

質問	日本は女性の社会進出が遅れていると言われていますが、特定の職や分野において男女比に偏りが生じるのは、その国や地域の文化によるものとして、その偏りを肯定することは可能でしょうか。
回答（大隅）	『我々はどこから来て、今どこにいるのか？』（エマニュエル・トッド著）には、歴史の過程で女性のステータスが低下していった社会（ロシアや中国など）と、個人主義的、核家族社会、双系的（父系的でない）で女性のステータスが高い社会（英国、米国、フランスなど）があり、このような家族類型と経済構造の間に相関性が認められます。国や地域の分化によって特定の職や分野における男女比の偏りを肯定する国もあれば、そうでない国もあるということが世界の現状です。日本はドイツと同様にやや父系的な家族類型を取ってきましたが、ドイツは女性の首相や欧州委員会委員長を輩出するようになって、変わりつつあるかもしれません。

● 「女子」枠の不平等感

質問	他大学で女子枠を設け、理工系で恣意的に女子を確保しようとする取り組みが見られます。この取り組みで多様性が確保できる一方で、試験成績を性別で振り分けており、かえって不平等ともとることができます。これについてどうお考えでしょうか。
回答（大隅）	日本において、大学進学前に女子生徒は数学や理科の点数が OECD 諸国の男子生徒より高いにも関わらず、理系進学しておらず、才能の活用ができていないことが大きな問題となっています。他大学の大学入学試験において女子枠を設けているのは、その分野における女性の参画があまりに少ないことを是正するための措置であり、一般選別とは別途の試験を行うため、試験成績を性別で振り分けているではありません。なお、都立高校入試では男女別に合格ラインを決めて同数入学させることによって、男子の合格点が女子より低いということが問題となったことがありました。
質問	特に研究職において男性が多いという問題が、しばしば指摘されており、実際に、特に理系分野においては男女の偏りは非常に大きくなっていると思います。その中で、女性研究者を増やそうという取り組みが行われているが、そもそも、脳の「性差」によって偏りが出るのであれば、やりすぎると逆差別ともいえる状況が生まれると思います。例えば、先日も東京工業大学が「女子枠」を導入すると発表し、議論が起こっていました。ここの線引きはどのようにされるものなのでしょうか。
回答（大隅）	「平均値」で言えば、男性は空間認知に優れ、女性はコミュニケーションに長けているという性質がありますが、個人差（分布）の方が平均値の差よりも大きいことをまず認識しておかれると良いでしょう。日本において、大学進学前に女子生徒は数学や理科の点数が OECD 諸国の男子生徒より高いにも関わらず、理系進学しておらず、才能の活用ができていないことが大きな問題となっています。他大学の大学入学試験において女子枠を設けているのは、その分野における女性の参画があまりに少ないことを是正するための措置です。一般選別とは別途の試験を行うため、試験成績を性別で振り分けているではありません。なお、都立高校入試では男女別に合格ラインを決めて同数入学させることによって、男子の合格点が女子より低いということが問題となったことがありました。
質問	ジェンダーについての質問です。よく電車などで痴漢対策として女性専用車両を見かけますが、痴漢冤罪防止対策として男性専用車両も作るべきだと思いますか？

質問	大隅先生に質問です。SNS では性の多様性を認める中で、女性専用車両だけでなく、男性専用車両も必要だという意見がたびたび注目を集めますが、この意見に対する先生の見解を知りたいです。
回答(大隅)	男性が「痴漢冤罪防止対策」として男性専用車両を望む声が多いのであれば、そのようにしても良いのではないのでしょうか？ 女性専用車両は、それを望む女性の声をもとにして作られました。参考書籍として『存在しない女たち』(キャロライン・クリアド＝ペレス著)をお勧めします。

●近代「性」の扱いについて

質問	大隅先生に質問です。 19世紀フェミニズムにおいて、自身の女性という性質を無視し、さらには捨てて、一人の人間としての性質に焦点を当てる動きがあり、現在も無性別的な考えはあると思いますが、(トランスジェンダーの場合を除いて)自身の性を捨てるという選択はその性を貶めることになると思いますか、つまり、生物学的女性を擁護する方法はその性にとどまり訴えることに限られるのでしょうか。 よろしければ回答お願いいたします。
回答(大隅)	私の尊敬するスタンフォードの神経生物学者の先生は、40代になって女性から男性に性転換され、バーバラからベンという名前になりました。彼は自身が女性であった時代に受けた差別体験をもとに、男性に転換されてからも、女性差別を取り除く努力を続けてこられました。性自認は簡単ではなく、アセクシャル、バイセクシャルの方もおられます。「生物学的女性性」は、多数ある属性のうちの一つです。どのような性自認であったとしても、個人個人を大切にすることが根本にあると考えます。
質問	大隅先生に質問です。 近代科学では研究対象が主に男性であり、男性が知性を持つウマ、女性が多産であるダチョウで表されていたというお話がありましたが、そういった固定観念が生まれた経緯について教えていただきたいです。男性の脳や体格、役割などに要因があるのでしょうか。
質問	大隅先生に質問があります。 近代科学の部分で、昔から骨格や解剖図などが男性のものを主に参考にして作成されていたとおっしゃられていましたが、なぜ昔のその時代からすでに男性が中心になっていたのかということについて何かお考えがあれば教えていただきたいです。 また、世界的にみて、工学系の分野の女性研究者が比較的少なく、実際に東北大学の工学部に入学して、工学部での女性の割合が低いなど強く実感しているのですが、そもそもなぜ工学系分野における女性の割合が少なくなってしまうのかという点について環境的理由など教えていただきたいです。
回答(大隅)	近代科学が男性中心であったのは、その担い手が男性であったことがもっとも大きいと思います。ただ、英語で「man」という単語が文脈によって「男性」を示す場合と「人」を指す場合があるように、「人=男性」といような認知バイアスは、さらに以前から存在していた可能性は大きいでしょう。例えば、聖書では神様が「アダムの肋骨の1本を使って女性を生み出した」とこととされています。キリスト教は比較的父系的な宗教です。肉体労働が重要であった時代には、筋力の強い男性が仕事の担い手と考えられたということもあるかもしれま

せん。日本で工学系に進学する女性は 16%程度ですが、OECD 諸国平均では 26%に達しています。大学進学前に女子生徒は数学や理科の点数が OECD 諸国の男子生徒より高いにも関わらず、理系進学していない点は、女性が理工系に向いていないということよりも、「女性が工学部に進学しても就職できないのではないか」等の無意識のバイアスが大きいと思われます。

《多様性を担うのは誰か》森本 浩一 総長特命教授 [言語思想] (教養教育院)

質問	他者とのコミュニケーションの中で多様性と善悪の線引きは何に委ねられるのでしょうか。見えない部分が人それぞれあるが、ハラスメントやいじめなど、個性に関わる人間関係の問題は多様性として寛容になれる所ではないと思います。
質問	森本先生にお聞きします。多様性の尊重は悪くすると無秩序の容認に変化しかねないと私は思うのですが、これを防ぐためにはどうすれば良いとお考えになりますか。
質問	森本先生に質問です。 自由があるから多様性があるとおっしゃっていましたが、多様性のために自由を以って権利を主張することとわがままであることの線引きは難しいと思います。時代によってもその線引きは変わってくると思うのですが、その部分についてどのような見解をお持ちですか。
回答 (森本)	合わせて回答します。会場の質問に「多様性を否定する考えも、多様性のひとつとして受け入れるのか」といった内容のものがありませんでした。この形式的なパラドクスはよく知られており、もちろん答えとしては、「多様性（自由）の尊重」は人間の尊厳に関わる共通原則であって、これを否定する立場は容認できないということになります。いじめやハラスメント、あるいは無秩序（共同性の破壊）をもたらすような自分勝手な行動というのは、多様性（それぞれの自由が全体として保持されること）を否定するものですから、それが多様性の名のもとに肯定されることはありえないと思います。ただ、秩序や無秩序という観念は曖昧なので、おっしゃるように「線引き」の議論は必要かもしれません。それは例えば、誰にとっても「受け入れ難い」最低限の「やってはならないこと」を見きわめるということではないでしょうか。
質問	「戦争は互いの正義のぶつかり合いだ」と言っている人がいた。互いの国や勢力が持っている正義を理解できない、正義の多様性を理解できないということは、本日の話と重なる部分がありそうに思えた。SDGs も否定するわけではないがあくまで国連に関わる人々の正義、考えでしかないのかもしれないと思った。
質問	森本先生に質問です。 ロシアウクライナ戦争ではそれぞれの国が譲れない主張を持っており、対話が進まない状況となっています。そのよう話し合いの中では第三者の介入という手段がありますが、第三者は合意形成においてどのようなアプローチをすべきとお考えでしょうか。
質問	森本先生に質問です。 先ほど人間の本質が自由であるため多様性が生まれる、そのため各人の自由を互いに守っていく必要があるというお話がありましたが、生態系の行き過ぎた人間中心主義の話のように、多様性を守るために人間の自由が制限されるといったことも起こりうると考えました。多様性の保護という点において自由の尊重と制限どちらも存在することに違和感を覚えたので、そのことに関してどうお考えかお聞きしたいです。
質問	欧州には「戦う民主主義」という概念がありますが、過激思想を社会から排除するのもある種のコミュニケーションの逃避といえるのではないのでしょうか。また、討論を拒否する相手に対して合意形成を試みるのは困難が伴うものですが、どのように向き合えばよいとお考えでしょうか。明確な答えを出すのは難しいですが、先生方のご意見を伺えれば幸いです。よろしくお願いいたします。

質問	<p>森本先生に質問です。</p> <p>「他者の世界にあって自身の世界にないものを取り入れることで自身の世界を拡張すべき」という内容がありましたが、その中には自信に対して何らかの害を与えうるものはあるのでしょうか。また、そのようなものがある場合、どのように判断、対処すべきなのでしょう。</p>
質問	<p>信念の対立があっても、他者の信念を理解しようという姿勢を取り続ける必要があるということですか。</p>
質問	<p>多様性のためには対話が重要とのことですが、宗教によっては妥協できない点もあると思います。対話でもどうしようもないことがあると思うのですが、そのようなときはどうすればよいのでしょうか。</p>
質問	<p>森本先生に質問です。</p> <p>信念の衝突から争いや差別が生まれるのを防ぐべく、終わりなき対話が肝要だとおっしゃっていましたが、善を前提とした対話だけの打開にも限界があるように感じます。ウクライナ戦争の戦前、あれほど国家間で対話が行われたにも関わらず、結局先手を打たれ開戦しました。その後も陣営間で対話の空回りが続いています。表面化されていない政府間の取引や事情がある可能性もありますが、表面上の議論での解決は極めて困難です。「健全な対話の継続」を行う基盤を作るには何が必要なのでしょう。</p>
回答 (森本)	<p>合わせて回答します。話題提供が言葉足らずだったために、誤解を与えたかもしれません。今回お話した「自由」は、可能性（「～でありうる」）として存在するという意味で、人間存在の本質として捉えられるものです。私たちは共同で生きるために様々なルールや制度で行動を制約しながら生きていますが、制約を合議によって生み出すことも、それに従って生きることも自由があってはじめてできることです。また、自らの自由においてある行動を選択したとき、その結果を引き受ける責任が生じるのは当然です。自由を前提にしなければ、人がその意見や行動を改める可能性も見込めないでしょう。</p> <p>他者は私たちの前に「～である」者として見えてきます。つまりある考えを持った者、ある行動をする者、としてです。そこには当然意見・行動のぶつかり合いが生じます。対話を続けるということは、今「～である」他者と私が、別のあり方へ変化してゆく可能性に賭けるということです。「空回り」が続くとしても、対話以外の簡便な問題解決の方法があるとは、私には思えません。衝突の前で思考停止して他者を拒否すれば、断絶と無視、あるいは力による支配や戦争に行き着くしかないでしょう。</p> <p>もちろん、実際にどう「対話」するのかというのは難しい問題であり、大きなテーマです。正義や公正さが何なのか、異なった考え方の人がいるのは当然です。そこで「敵か味方か」に陥らず、各人が自らの幸福を追求してゆけるような公共世界を実現するにはどうしたらいいのか。もちろん最低限の言論のルールや紛争解決の制度が必要です。討議や公共的合意形成のあり方については、政治学や社会思想分野での議論の歴史がありますから、関心のある方は勉強してみられるといいと思います。まずは参考文献で挙げた齋藤純一さんの本などを読んでみてください。</p> <p>私が今すぐに思いつくことを二点だけ言うとすれば、まずひとつは、お互いが自らの正義を</p>

かざしてぶつかると「敵か味方か」に陥りがちなので、逆に「何が不正義・不公正か」に目を向ける、ということがあります。「過激思想」と呼ばれる人たちもまた、単に社会（世界）を破壊したいのではなく、自分が考える不正義に抵抗するために過激化している場合が多いはずです。自分たちが不当に搾取されているとか、資源が不平等に配分されているとか、そういったことです。宗教的盲信に走る人も、生きることの不安や何かしらの欠如感を抱えているかもしれません。そうした場合、単に「これが正しい」を押しつけるのではなく、相手が何を「正しくない」「よくない」と感じているかを丁寧に聞くことが大事です。そこに納得のできる理由があれば、合意に至る道筋が得られるかもしれません。いずれにしても、他者の中には私に見えていないものがあるということです。

もうひとつは、意見の差異・対立を「プライド」に結びつけることの危険性です。確かに一定の自尊感情は私たちにとって必要なものですが、感情によって目が曇ることから起こる理性的思考の中断、敵対意識の暴走、権威・権力の乱用などは、日常から戦争状況まで、あらゆる場面で観察されるものです。それは教育や経済活動の場でも数多くの無意味なコストとストレスを生み出しています。無自覚のうちに自分がプライドの罠にとらわれていないか、警戒が必要です。特に自分がある集団に同一化する想像が働き、集合的なプライド幻想に飲み込まれてゆくことの危険性には特に注意すべきです。

質問

歴史の授業など、学校で習う知識のために様々な人に対するステレオタイプが形成されて多様性が失われてしまうことはありますか。

回答（森本）

教育のあり方の問題ですね。歴史は人が現実的にどのような行動選択をしてきたのかを教えてくれますから、人間の多様性（＝可能性）を考える上でも重要な素材になります。ただ、歴史は単なる事実データではなく、過去の出来事の「解釈」だということを忘れると、おっしゃるようなステレオタイプな思考を誘導しかねません。

質問

森本先生

「支援者・共感者に対して当事者～」というお話がありましたが、支援者・共感者はどのような心持で当事者と話せばいいのですか？

回答（森本）

アリストテレスは、人間が行為する目的は「幸福」であると言っています。それはつまり、私たちは、現在置かれた状況を引き受けつつ、自分がよりよい状態になることを求めて生きるのだ、ということです。幸福が何であるかを決めるのはその人自身です。「当事者」が自らの幸福を自ら構想できるように支援すること、またその実現を阻む障害物を私たちが少しでも取り除けるのであれば、そのために協力すること、そういうことが重要であるように思えます。

質問

自由主義社会は、経済的、社会的またはその他の強者をその自由の為に放置するものと、弱者をその自由の為に強者の自由を制限して保護するものという、相反する性格を持つと考える。これらに対し現実では国家は社会保障等による部分的な富の再分配によって解消しようとしているが、両者から不満が絶えない現状があるように思われる。結局、こうした問題が解消されることはあるとお考えだろうか。ただし、全人類ないし国民を考える場合、非現実

的な望みを持つ個人も一定数存在すると思われる為、そうした「外れ値」は除外して考えていただきたい。

回答（森本）

話題提供の中で述べた「自由」の意味については、別の回答で書いているので省きます。ご質問はいわゆる自由と平等の関係をめぐり問いですね。確かに個人の自由を最低限保証するための福祉的対応に関しては様々な議論があります。私は専門外なので、参考文献で示した齋藤純一『不平等を考える』などを覗いてみられることをお勧めします。いずれにしても、世界の複雑さを考えると「問題の解消」を性急に求めること自体が危険です。「終わりのない対話」を続ける忍耐が必要でしょう。

質問

「理解し合えないという前提を持つべき」というものはある種健全な人間側の意見であり、精神疾患などで苦しむ人間は逆に社会から受け入れられ共感されなくとも理解されることを望むことが多いのではないかと思います。また、多様性というものが本当に認められれば精神的な異常すらも特性の一種として認められると思いませんか。

回答（森本）

話題提供では「理解」という言葉を、他者を「～である」者として捉えるという最も広い意味で使っています。人は他者とともに生きる存在ですから、他者に「理解されたい」と願うのは当然のことで、それは障がいがあるとかないとかとは無関係です。私は精神障がいについて詳しくないのでご質問の趣旨が飲み込めていないかもしれませんが、「異常」を受け入れるかどうかというより、正常／異常という区別を出発点にすることが、理解にバイアスをかけてしまうように思えます。もちろん、障がいとして括られる身体（脳を含む）の状態は千差万別ですから、それこそ多様です。相手が問題を抱えている場合、一律に「こうあるべき」で縛るのではなく、本人がどのようにありたい（なりたい）かを聞きつつ、私たちに何ができるのか、できないのかを見定めてゆくことになるでしょう。それは結局、「健全」な他者への関わり方と同じではないでしょうか。たぶん問題なのは、身体・精神にかかわらず障がいを持つ人の存在が見えにくくされていることです。目の前に現れてくる状況がないと、理解も進みません。

《話題提供者全員に宛てたと思われるコメント》

質問	私たち学生にできることは教養としての知識を心にとめておくことでしょうか。
回答(大隅)	広く教養(リベラルアーツ)を身につけることは人としてとても重要です。大学低学年の間に、世界がとてつもなく広く、世の中には種々の考え方があることを知っていただくために、なるべくたくさんの本を読んでください! 図書館でお待ちします♪
回答(森本)	教養は知識ではありません。知識を利用しながらよりよく生きてゆく技倆(スキル)といったものです。生きるということは他者と関わることとほぼ同義です。昼に食べるパンも誰かが作った小麦を誰かが焼いてできたものですから。他者は理解し尽くせないとはいいましたが、対話を通じて相手をよりよく理解しようと努め続けることが、生存のスキルを高めることにつながります。仲間うちや同世代の枠にとらわれず、いろいろな人の声を聞き、考えを交流する機会を持つことが重要かと思います。
質問	人間はこうして様々な問題について深く考え、議論していますが、他の動物のように本能的に生きていく(他の動物ももしかしたら議論しているかもしれない)ことはなぜできないのでしょうか。
回答(千葉)	様々な問題について深く考え、議論するというのは、かなりの部分まで人間の本能(生得的な性質)ではないかと思います。生物ごとに生得的な性質は異なっていて、それが生物の多様性の本質の一つですから。
回答(大隅)	進化の過程でヒトの脳が巨大化し、道具使用、言葉の発明等を経て文明を築いてきたことによって、人間の社会はとてつもなく複雑化しました。そのことは、本能的に生きることを難しくしていると思います。
回答(森本)	動物の意識や主観性がどうなっているのか、私にはわかりません。現代の人類が生物として特別であるわけではなく、単に、進化の過程で言語を持つようになり(言語によって世界を思考する能力を得て)、その結果自らが「文明」と呼ぶようなものを作り上げてきたという事実があるだけです。たかだか数万年の間の出来事です。「本能的」というのが、進化によって得たメカニズムに従うという意味だとすれば、人間もまた広い意味での本能に導かれて現在まで存続してきたと言えるのではないのでしょうか。
質問	『多様性』という言葉をごどのように市民に広めていくかを教えていただきたいです。現在ネットやメディア、SNSにおいてSDGsに基づいた『多様性』という言葉が頻繁に言われています。今日ご講演していただいた方々は『多様性』にある程度の意味合いを付随させていますが、一般市民にとっては『多様性』が漠然としたイメージになっているのではないのでしょうか(自分も含めて少なくとも御三方ほどは考えられていない)。ルボン『群衆心理』において意味が曖昧な言葉の流布がナチズムを生んだと論じていますが、私は現在似たようなことが行われていると思ひ、『多様性』キャンペーンの行く末に懸念を抱いています。民主主義社会においては多数決が原理なのでいくら御三方が優れた考え方を持っていたとしても、市民が聞かない、理解しない場合は世界はいい方向へ行かないどころか悪い方向に向かってしまう可能性があると思います。だから市民にその考え方を知らせる段階も重要だと思ったのでこのような質問をさせていただきました。

回答（千葉）	<p>個人的には SDGs の本質は、その前身の MDGs で貧困、差別の解消、健康で持続可能な社会の実現だと思っていて、多様性はその実現に向けた手段のひとつと思っています。なぜなら多様性には必ずトレードオフがあり、ひとつの正解は存在しない、という性質が備わるからです。つまり一人一人の個人やその考え方が大切、というのが多様性の本質だと考えています（多様性は重要でない、という考えを意見として認めるのも多様性。その意見の妥当性は別の面から判断されなければならない）。多様性とは社会にとって攻撃の考えではなく、変な方向に行くのを止める、防御の考えですね。</p> <p>本来、守備の考え方なのに、それが攻撃に回るようなことがあればそれは確かに危険です。サッカーなら自軍ゴール前がガラ空きになる状況なわけですから。</p> <p>たとえば多様性がイデオロギーと化して、結果として本来の意図とは逆に、貧困、差別の解消、自由な生き方を阻害するようなことがもしあれば困った話で、そうしたリスクを懸念されているのだと思いますし、それはありうることです。またこのような場合、往々にして貧困、差別の解消を目的として、貧困、差別の拡大が行われる、というのも歴史が示すところです。実際、ナチスは純粋さ、という言葉だけは正しく見える概念を利用して、自然保護と人種差別、外来種駆除と迫害・大量殺人を同じ論理で同時に実施した経緯がありますし、弱者救済という福祉政策として社会的弱者への迫害が行われた国もあります。</p> <p>そこはよく注意しないといけないところで、多様性が本来の意味をはずれて個人の自由を阻害したり、個を統制したり意見を抑圧する仕掛けにならないようにしなければなりません。従って社会への発信の仕方にはその意識は大切だと考えています。重要な意見だと思います。</p>
回答（大隅）	<p>重要なポイントですね。今回「多様性」というキーワードのもとに、3人の講師が話し、1人の先生が指定発言をされました。それぞれの分野で種々の「多様性」の捉え方があることを講義全体として伝えられたとすれば、その点において、今回、約2,500名の東北大学新生に対して大きな意義があったと思います。もし講義を聴いた皆さんがそれぞれ、「多様性の尊重は大事である」ことを実践し、他の方にさらに伝えていただければ、いっそう広げることができます。私自身はダイバーシティ担当副学長として、種々の機会に講演やセミナーを行っています。その他、例えば以下のようなウェブサイトにおいて自身の意見を発信していますのでご参考まで。</p> <p>https://note.com/sendaitribune/n/n94527fa49b0d</p>
回答（森本）	<p>「リンゴ」が何かはわかっていますが、その意味は何かと問われると答えに窮します。ChatGPT なら「果物の一種で……」と応答するでしょうが、それは説明であって「意味」ではありません。意味とは、語や文を物や出来事と結びつける関係です。この「関係」を設定することで人間は「世界」を持つことができます。それは人間にだけできることであり、現在のAIは世界を持ちません。「世界がいい方向へ」向かうということは、「言葉がいい方向へ」向かうということです。しかも言葉というのは、私と他者が意思疎通する過程を通じてそのあり方が決まるものですから、コミュニケーションを続けること、言葉による相互理解を試み続けること以外に世界を「いい方向へ」向かわせる方法はありません。ナチズムが生まれた原因のひとつは、ヒトラーが「敵か味方か」で人類を分断し、世界を極度に単純化して見せたことがドイツ国民の心をつかんだという点にあります。確かに、「多様性」は曖昧な理想論に過ぎないと感じられるかもしれま</p>

せんが、単純明快な図式で現実を割り切ってしまうことの危険性もまた明らかです。ただ、おっしゃる通り、「市民」(?)にどう伝えてゆくか、つまりどう対話するかは重要な課題であり、具体的な方法に関して知恵を出し合ってゆかなくてはなりません。近年、若者を中心として、従来のイデオロギーにとらわれない社会運動の盛り上がりがあります。ネット上でのコミュニケーションに習熟した世代の発想力・行動力に期待がかかっていると思います。